

目 次

緒 言	17
前編 国語研究の理念と方法	1
○ はじめに (学問一般についての基礎的弁別) 3	3
I 国語研究は何を目的としたらよいか.....	6
一 目的は自己にかかわるもの	6
二 国語研究の必要	7
三 そのものを知る	7
四 科学的究明	8
五 人間生活・社会生活との関連においての、言いか えれば、生活現実との関連においての科学的究明	8
六 現代人の国語生活の発展への寄与	9
七 国語観	9
八 国語研究目的のもとでの個人の態度	10

II 国語観	11
一 言語とは何か	11
二 母語	11
三 母語認識	12
四 自己にとっての国語実態	13
五 生活語観	15
六 言語表現観	15
七 観の生成	16
III 国語研究に関する諸問題	17
一 対象上にどのような問題があるか	17
1 言語と非言語	17
2 自然言語と機械言語	17
3 外的言語と内的言語	18
二 方法上の諸問題	19
1 客観的方法と主観的方法	19
2 割りきること	20
3 特殊的方法と普遍的方法	20
4 演繹的方法と帰納的方法	21
IV 「国語学」概念	22

一 国語学は人文学と自然学との基礎学である	22
二 国語学は実証の学である	23
三 国語学は、一面、資料学（事実学）として規定されるものである	24
1 資料学→ものの学問	24
2 ものの学問とかたちの学問	25
3 調査	27
4 資料と説明	29
5 事実の学問（事実学）	30
6 資料の世界	30
7 資料処理の厳密	32
四 国語学は、「二」ゆえに、一面、記述学として規定されるものである	32
1 実証の学ゆえに記述学になる	32
2 最初の記述	32
3 記述と思考	34
4 書いてながめる	35
5 「記述」の例説	35
6 記述推進の実際	37
7 記述のしかたとしてのノート法・カード法	37
8 記述の精神	39

9	純粹記述	39
10	記述即説明	40
11	記述体系	41
12	記述からの独創	41
	五 国語学は人間の学である	42
1	人間文化の学としての国語学	42
2	人間精神の学としての国語学	43
3	人間社会の学としての国語学	44
4	人間の学としての国語学	44
	V 国語研究者	47
一	人間言語の学と国語研究者	47
二	愛情	47
三	個性の自覚	48
1	知的と情的と	49
2	客観的態度と主観的態度と	49
3	分析的な見かたをするタイプと包括的な見かたをするタイプと	49
4	回顧的と展望的と	49
5	つめたい人間とあたたかい人間と	50
四	調和的人格	50
五	研究の個性化	51

六	生活者 国語研究者	51
	VI 生活即学問	53
一	ことばの学問	53
二	研究の生活化	54
三	私のばあい	54
四	国語学の性格	56
	VII 国語研究の世界とその諸領域	57
	VIII 研究参考書	66
一	総説書	66
二	部門別参考書	68
三	傍系参考書	73
四	第一級の参考書を	74
五	自己の生活の中に諸種の参考書がある	74
六	書かれたものと話されたもの	74
七	雑誌論文について	75
八	辞書・事典の類について	75
九	参考書(→参考文献)の利用法について — 参考書	

の読みかた——	75
IX 研究対象の把握	78
一 研究対象	78
二 「把握」の意味	78
三 把握の進展	78
四 研究主題の確立へ	80
五 方法と対象との相関	81
六 対象世界——国語というもの——	81
X 研究方法	83
一 方法の基礎	83
1 身辺照顧（環境整理）	83
1' つまらぬこと	83
2 態度	84
3 言語感覚の錬磨	84
4 問題感覚の振起	88
二 方法の合理化	88
三 方法→分析	89
四 方法→比較	89
五 方法→体系化	90

六 方法→対象に即して実証的に高められるもの	90
七 手段→方法のための手だて	91
XI 研究の独創	92
○ 結語	94
本編「現代語」学	97
第一章 総説	99
一 学問	99
二 国語学の目的	105
1 国語とは何か	105
2 国語研究の学問	106
3 国語学の目的	106
4 現代語へ	108
5 私の目的意識	110
6 方言学 国語学	110
三 対象と方法	111
1 研究の対象	111
2 研究の方法	111
3 国語研究の方法 甲	112
4 国語研究の方法 乙	113

5 「方法論→方法」の明確	114
四 「現代語」学の体系	115
1 研究の体系	115
2 これまでに見られた国語学関係の研究体系	115
2' 研究体系一般についての私の努力目標	119
3 私の国語学体系	121
4 「現代語」学の研究体系	127
五 周辺（関連）諸学	128
1 第一周辺学として、いわゆる国文学を指摘することができる。	129
2 第二周辺学として、精神科学系の諸学を指摘することができる。	130
3 第三周辺学として、社会科学系の諸学を指摘することができる。	131
4 第四周辺学として、自然科学系の諸学を指摘することができる。	133
第二章 現代語の共時論的構造	135
第一節 序	135
第二節 内的構造（論その一）——〈方言の見地から〉——	135

一 第一次分析	136
1 社会意志	136
2 無自覚浮動の心的状態	139
二 第二次分析	140
1 表現に関する「ていねい」の好み	141
2 「婉曲」の好み	141
3 「断定保留」の好み	142
4 「寡言尊重」の好み	142
5 「うわさ」の好み	143
6 「あそび」の好み	143
7 「滑稽」の好み	144
8 「比喩」の好み	144
9 「標準」の好み	145
10 「言語道德」の好み	145
11 「古雅」の好み	146
12 「美化」の好み	146
13 「制肘」の好み	146
第二節 内的構造（論その二）——〈日本語一般の見地から〉——	147
一 言語——人間存在〈人間〉との共存	147
二 創作欲	148
三 模倣	148
四 熱狂と冷静	149

五	言語不信の意識	150
六	言語の生産性——文化性・思想性——への無知識	151
七	内的構造に対する要請の意識——「論理的表現を」との要請——	152
1	「数」の問題	152
2	人称代名詞の整理	152
3	短文化	153
4	修飾法の整理	153
5	主・述の対応を旨とする	154
八	むすび	154
	第三節 外的構造	154
一	国語現実の諸相	155
1	国土と国語	155
a	a 境界性	155
b	b 日本孤	156
2	方言相	157
a	a 東北と西南との対応	157
b	b 中国地方の北がわと南がわ（山陰と山陽）	158
b'	b' 四国の北と南	158
c	c 関東地方	158
d	d 中部地方	158
e	e 近畿地方	158
3	共通語	159
4	標準語	161

5	階級語	162
二	外的構造の分析	163
	◎ 構造論の対象	163
その一	音韻構造	163
1	1 音声現象と音韻構造	163
2	2 構造の分析単位	164
3	3 開音節	164
4	4 複子音・二重母音	165
5	5 等時音節	165
6	6 語の音節数	166
7	7 語アクセントの型	166
8	8 動と不動	167
その二	文法構造	168
1	1 文法構造の所在	168
2	2 文の文法構造	169
	○ 二つの見かた	169
a	a 他へのはたらきかけのつよいもの	171
(1)	(1) 願望・依頼の表現法	172
(2)	(2) 命令の表現法	172
(3)	(3) 勧奨の表現法	172
(4)	(4) 禁止・制止の表現法	172
(5)	(5) 勧誘の表現法	172
(6)	(6) 問尋の表現法	172
(7)	(7) よびかけの表現法	172

(8) 応答の表現法	172
(9) 意向の表現法	172
(10) 反撥・抗弁の表現法	173
(11) 推量の表現法	173
(12) 伝達の表現法	173
(13) 想像の表現法	173
(14) あいさつの表現法	173
b 相手を特定的には求めないもの	174
(15) 説明の表現法	174
c まったく自己本位のもの	175
(16) 感嘆の表現法	175
(17) 唱えの表現法	175
3 表現形式にしたがっての下位区分	176
(1) 命令表現法について	176
(2) 禁止命令の表現法について	177
(3) 勧誘の表現法について	179
(4) 問尋の表現法について	180
4 文章の文法構造	180
(1) 文接続の態	180
(2) 段落	181
(3) 文章と文	185
(4) 日本語の文構造の特性に根ざした非論理文	187
(5) 話しことばの文章と書きことばの文章	189
5 文法構造の不動と動	190
6 表現法と表現	191

その三 語彙構造	192
1 語彙・語詞の面	192
2 語彙の世界	192
3 生活語彙分類体系 試案	193
a 自然語彙	193
b 人間語彙	193
c 社会生活語彙	194
d 生業語彙	194
e 生活一般語彙	194
4 方言語彙構造	195
5 共通語の世界	196
6 語彙の流動	198
7 語彙中の語詞	199
8 まとめ	200
その四 表記構造	200
1 書きことばの問題	200
2 日本語の表現法と日本語の表記方法	201
3 たて書き・よこ書き	201
4 文章にあつての段落の対応	201
5 文章にあつての漢字とかな（ひらがな・カタカナ）との対応	202
6 表記面の芸術性	203
7 表記上の句読点	203
8 文章表記上の諸符号	205
9 抑揚面	205

10 表記の内面	205
第四節 跋	206
第三章 現代語の通時論的構造	207
第一節 国土上の日本語現実	207
一 通時態	207
二 歴史的現実	207
第二節 言語地理学的構造	209
一 方言分派関係	209
二 分派関係の把握	209
第三節 歴史的法則	212
一 分派関係をなす歴史的現実に認められる歴史的法則	212
二 転化の法則	213
三 省略の法則	214
四 複合の法則	214
五 飛躍	215
第四節 発展的動向	216
一 「言語わく」の拡大	217
二 言語の創作活動の多様化	218
三 人工世界語の発達	218

第四章 現代語生活——現実と理想——	220
第一節 序説	
— 現代語生活論の地位 —	220
一 高次共時論のたちば	220
二 教育論の必至	221
第二節 言語生活としての方言生活・共通語生活・標準語生活	222
一 現代語生活	222
二 現代語生活の性格	223
三 現代語生活としての方言生活・共通語生活・標準語生活	224
四 方言生活	224
五 共通語生活	225
1 心の共通語を	225
2 方言生活卑下感の除去	227
3 能動の共通語生活	228
4 表現はすべて個別的	229
5 東京語批判・大阪語批判	230
6 むすび	230
六 標準語生活	231
1 共通語と標準語	231
2 共通語生活から標準語生活へ	232

3 現代共通語生活の様態	233
4 標準語体系	234
5 標準語生活	235
第三節 言語生活の自覚と 言語生活の発展	236
第四節 標準語体系の中の表記法	239
一 言語構造分子としての文字付符号	239
二 表記にかな・漢字を利用活用することについて <small>の</small> 小案	240
「正書法のしおり」	240
三 漢字の教養	259
四 表記抑揚	259
第五節 表現法中心	
— 標準語体系 —	259
一 中核となるもの	259
二 表現法自覚の根本	260
第六節 根本日本語と精神生活	262
一 根本日本語	262
二 精神生活の発達	263
三 表現の法	264
結 語	266
あとがき	267

緒 言

ここに発表するのは、私の国語学概論である。

ここに旧稿の整序にあたり、「国語」とあるのを、「日本語」とはせず、「母語」との意をこめて、このままにしていこう。母語との思想は、また、つねに有意義なものであろう。

概論とは何か。私は、学の大要を整理するものが概論であろうと考えている。

学の大要に通じることは容易でない。したがって、私には、概論の過重がひしひしと感じられる。

しかし、学に志して幾年かを経過してきた者として、今日、私も、概論の業にたち向かって、能うかぎりの努力をしたくも思う。私なりの責務を感じもする。

私は、日本語の現代語の研究にしがって来た者である。たずさわる範囲は限られている。これをもってながら、国語学の概論を言うのはなぜか。これまでに、私も、いわば国語の全相を、社会的にも歴史的にも研究してきた。が、その汎国語研究の収約は、現代語研究になった。こういうたちばで志向されるものが、私の「国語学概論」である。

私は、国語学概論の精神のもとに、現代語の学に向かう。私の国語学概論が、実践上、「現代語」学のかたちになっていく。

言うまでもなく、この「現代語」学は日本語の「現代語」学である。しかし、私は、これを、言語学の世界に定位しようとする。(それが、私の国語学概論の精神である。)[「現代語」学が、ただに一国語の範囲にのみ通用する理念のものであったりしてはならないであろう。

以下に、私は、精神の自由を尊重することにつとめつつ、自己の「現代語」

I 国語研究は何を目的としたらよいか

一 目的は自己にかかわるもの

言うまでもなく、目的は、自己にかかわるものである。目的が、どのように一般的に定立されようとも、人にとっては、それはかならず自己にかかわるものである。

自己とのかかわりにおいて、目的が考えられた時、目的は、もっとも深刻なものとなる。

自己とは、社会ないし世界、いな宇宙に生きる自己にほかならない。この意味で、目的には、つねに人生観・社会観が密着している。

目的は、みずから納得しうるものでなくては、意味をなさない。それゆえにまた、目的は、定まりかねるのがつねである。理屈としてはわかっている、なかなかには納得しがたいのが目的である。

したがって私もまた、以下に目的を論じて、それはひとまず、今の自己の胸中を語るばかりのものである。

もっとも、これがにわかには否定されてよいものだとは、私も考えていない。私の論旨の否定のためには、私の経験を越えた経験が必要であるとも言えるように思う。

目的というのは、しだいに身についてくるものではないか。

それであって、目的は、おのずから大局的でなくてはならないと考えられる。「遠くを見る」目的意識が、ここに肝要である。私どもは、目的のために、純潔の眼をもって、近くを熟視するとともに、遠くを凝視すべきであろう。

二 国語研究の必要

国語、すなわち日本語は、研究の必要がある。(——このゆえに、研究の目的について、考慮する必要がある。)

研究とは、そのものに関心を深くしていくことであるとも言えよう。私どもの国語に関しても、たしかに、これに関心を持つことが必要である。私どもは、国語によって生活しているからである。

研究とは、「自己の現在を超越して新しい現実に進む努力の一つの表現」である。(阿部次郎氏『三太郎の日記』による。)このような研究が、国語のために必要である。

三 そのものを知る

研究にあっては、そのものを知ることが、当面の目的とされる。言いかえれば、研究は、事実をまず明らかにしなくてはならない。国語研究は、当面、国語の事実を明らかにすることを目的とすべきであろう。(当面とは言い条、私どもには、これが、おおはばな研究行動になる。)

事実を明らかにしなくては、研究とは言えない。さてこの事実を明らかにすることが、容易ではない。明らかにしたと思っていること、わかっているつもりのことの、じつはわかっていないのに等しいことが、なんと多いことか。一例を出してみる。共通語感の中では、「オマエ」はととのったことばで、「オメー」はぞんざいなことばであろう。ところが長野県の北部では、「オマエ」は相手をばかにしたことばで、「オメー」はしたしみぶかいことばだという。共通語の考えをもって、長野県北部のことばを云々することはできない。

そのものを正しくそのものとしてとりあげ、事実を明らかにすることがなくては、研究を言うことはできない。